あいのその　2024年10月号

「わたしの舌がまだひと言も語らぬ先に　主よ、
あなたはすべてを知っておられる」（詩編139編4節）

愛の園保育園　042-325-1045

知っているつもりだったけれど、実は自分がそれまで思っていたり考えていたりしたのとは少し違っていた、あるいは全然違った・・・ということが何事につけ私たちにはあるのではないでしょうか。

しかもそれは意外なことに、自分自身のことについても言えます。私たちは、自分のことは自分が一番知っている、わかっていると思っていても、客観的な手段を使って自己分析してみると、予想外の結果が出ることもあります。あるいは、できないと思っていたことや、自分には不向きだとか無理だとか駄目だとか思っていたことでも、やってみたら意外とあっさりとできたり、自分にむしろ合っていたり、ということもあるかもしれません。そのように、私たちは自分のことでさえよくわかっていないことが多々あるのですから、ましてや他人のことになればなおさらでしょう。人の心はわからない。わかろうと思い、努めることはできても、すっかり知り尽くすことはできません。そうであっても、世の中とは、そんな人間同士が共に生きていかなければならないわけですから、なかなかそう簡単にはいかないのです。

そのような私たちのことを、ただ神だけは、すっかり、すべて完全にご存じなのだと聖書は語ります。それが今月の聖句です。神がこの世界をあらゆるものを創り出したのであれば、そこにあるものをすべて知っているのは当然のことでしょう。しかし、この聖句が語っているのは、神さまはすべてお見通しなのだから私たちは悪いことはできない、といったような、監視の目で見張られているのだという警鐘や警告ではありません。そうではなく、神は創ったものに対する責任者として、いついかなるときにも見守り、大丈夫か、うまくやれているかと心配し、何を考え、何を必要とし、何を喜び、何を悲しみ、何を訴えようとしているのか、そのことを知っていてくださるのだ、ということです。私たち以上に私たちのことを、私たちが本当に活き活きと生きることができるために、神は見て、知っていてくださるのです。

科学や技術の発達によって、かつては知らなかった多くのことを知ることができるようになった私たちですが、しかし根本にある人間理解、それを本当に実践してくださるのはただ神さまだけであるということ、そのことをまず知るところから、私たち人間同士が本当に互いに理解し合う思いをもって生きることができるのではないでしょうか。

（牧師　西脇　正之